

知ることからできることへ!!		小田 昭子
~カンボジアとぼくたち・わたしたちはつながっているんだ!~		横浜市立岡津小学校
担当教科: 全教科	実践教科: 道徳	時間数: 7 時間
対象学年: 小学 2 年生	対象人数: 32 名	

カリキュラム

<実践の目的>

研修で見てきたカンボジアの人々の現実や前向きな力、また多くの支援団体がカンボジアで援助している実態を、具体的に伝えることで、クラスの子どもや保護者の方々に、「一人ひとりがしっかりと大事にされながら、助け合うこと」の素晴らしさを感じてほしい。また、世界の貧困や飢餓などの現実を開発教育の授業形態で行うことで、カンボジアや貧しい国と自分たちの住んでいる日本とのつながりを感じ、その上で、「カンボジアや世界のことを知った今、自分たちは日本にいて何ができるのか。」について、友達と話し合っって多くのアイディアを出させ、一人ひとりの行動につなげさせたいと考えた。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	「自分たちの生きるちきゅうの大きさやせかいの広さをかんじよう」 ねらい: 世界の広さを知り、カンボジアに関心をもつこと。	(1) 地球儀や世界地図を見て、自分たちの住む地球の大きさや世界の広さを知る。 (2) カンボジアの位置を捉え、日本と比べて暑いのかを想像し、カンボジアについて知りたくなったことをまとめる。	(1) 地球儀・カラーコピーした A3 サイズの世界地図(一人一枚) (2) 質問・感想用紙
2	「カンボジアの人たちのくふうをそうぞうしよう」 ねらい: 物の少ないカンボジアでは、遊びや生活で工夫していることを知る。地雷が埋まっているという現実を知る。	(1) カンボジアの道路事情から、どんな国なのかを想像する。 (2) カンボジアの子どもたちの間で有名なアラピア(休日)という遊びをする。 (3) おもちゃや布(クロマー)に触れ、使い方を想像する。 (4) 地雷でけがをする子ども話ののっている絵本を見て、戦争があったこと・地雷がいまだに残っている現実を知る。	(1) 現地で購入したクロマー・おもちゃ (2) 現地で購入した絵本
3	「日本とカンボジア、同じところとちがうところってなあに?」 ねらい: カンボジアの街の様子を知り、親しみの	(1) 国旗・アプサラダンス・アンコールワットについて知る。 (2) 街の写真から、日本と同じところ・違うところを考える。 (3) 子どもたちが遊んでいる写真を見て、日本と同じところ・違	(1) カンボジアの国旗(印刷したもの) (2) カンボジアで撮影した写真

	<p>気もちをもつ。</p>	<p>うところを発表。写真のカンボジアの子どもになりきって、皆の前で楽しく会話をする。</p>	
4	<p>「カンボジアの子どものようすを知ろう。」</p> <p>ねらい：カンボジアの子どもの優しさや逞しさ・大切にしていることを知る。</p>	<p>(1) ごみ山や孤児院の子どもの様子を知る。</p> <p>(2) 家族と離れてカンボジア日本友好学園で学ぶ、子どもたちの様子や将来の夢を知る。</p>	<p>(1) 現地で撮影した写真・孤児院の子どもがプレゼントしてくれた絵</p> <p>(2) 現地で撮影した写真・現地でインタビューしたもの</p>
5	<p>「字が読めない・誰とも話ができないって？困っている人がいたら、どうする？」</p> <p>ねらい：字が読めないこと・話ができないことによる不安な気持ちを体感する。支援活動をする人やカンボジアの人たちの喜びを知る。</p>	<p>(1) 読めない文字で書かれたラベルの飲み物を飲むことで、字を知らない怖さを体感する。</p> <p>(2) JMAS が地雷を撤去する様子・ユネスコによる水上寺子屋活動の支援の様子、IVY（国際ボランティアセンター山形）による女性組合活動の女性たちがつながりを感じて生き生きと活動している様子を知る。</p>	<p>(1) カンボジアの言葉で書いたラベル・ペットボトルジュース五種類</p> <p>(2) 現地で撮影した写真・現地でインタビューしたもの</p> <p>(3) 水上寺小屋のマーク（マジックでかいたもの）</p>
6	<p>「カンボジアとぼくたち・わたしたちはつながっているの？」</p> <p>ねらい：食べ物がなく死んでしまう人の数・バナナやマグロを輸入する実態・熱帯林の減少する理由などを知り、日本とカンボジアや貧しい国はつながりがあるということを感じる。</p>	<p>(1) 食べものがなかったり、栄養が不足していたりして、死んでしまう人がいることを知る。</p> <p>(2) 世界の食料事情を知る。</p> <p>(3) みんなの食べている好きなお肉の種類を出してもらい、その実態を知る。</p> <p>(4) 貧しい国から大量に輸入している製品と、作り手側の実態を知る。</p> <p>(5) 熱帯林の存在・広さと役割、減少している理由を知る。</p>	<p>(1) 黒板に貼りだす文字</p> <p>(2) ジュース6L分</p> <p>(3) 黒板に貼りだす絵（牛・豚・鶏・穀物）</p> <p>(4) 黒板に貼り出す絵（バナナ・えび・まぐろ・アイス・ポテトチップス・洗剤）</p> <p>(5) 一般的なバナナとフェアトレード品のバナナ</p> <p>(6) 黒板に貼りだす文字と絵</p>
7	<p>「知ることからできることへ!!～カンボジアとぼくたち・わたしたちはつながっているんだ!～」</p> <p>ねらい：日本にいる自分たちにできることのアイディアを出す。</p>	<p>(1) 今までの授業を振り返る</p> <p>(2) これから自分たちにできることを、自由な形式で友達と話し合い、プリントに書き出す。</p>	<p>(1) 教室に掲示している写真</p> <p>(2) ワークプリント</p>

授業の詳細

1時限目：自分たちの生きるちきゅうの大きさやせかいの広さを感じよう。

まず、地球儀を見せて、自分たちの住む星について捉えさせると、「え！そうなの！」「地球が丸いって初めて知った！」などの小学2年生らしい驚きの声が聞かれた。

次に、カラーコピーした世界地図を一人ひとりに配ると、初めて世界地図を見る子どもたちは、皆興味津々であった。世界地図をすでに見たことのある児童に、知っていることを発表させたところ、「真ん中の線は赤道っていうんだよ。」「日本はここだよ。」との意見がでた。初めて見る子どもたちは、自分の知らないことをすでに知っている友達の発表を聞いて、「すごい！」と感心していた。7時間目の最終授業において、子どもたちだけで話し合いをする計画があるため、「世界地図をすでに見たことがある子も見たことのない子もいるのは、友達一人ひとりみんな違うからだね。だからこそクラスのみんなで協力したり話し合ったりすると新しい力が生まれるんだね。」と話した。

世界地図に親しませるために、しばらく簡単なクイズを出したが、最後にカンボジアに関心をもってもらうために、赤道に近づくにつれ、どんどん暑くなることを伝え、「では、カンボジアは日本と比べて暑いのかな？寒いのかな？」と聞くと、「暑い！！」と元気に反応していた。授業の最後には、カンボジアについて知りたくなったことを質問の形で書いてもらった。

《知りたくなったこと》

・どんな食べ物を食べるの？ ・何色が好き？ ・何をしている時間が一番楽しいですか？ ・おとなりのラオスやタイ・ベトナムには行ったことがありますか？ ・外国に行くならどんな国に行きたいですか？ ・どんなあそびをしていますか？ ・わたしと友だちになってくれますか？

《子どもたちの感想》

・せかいのことがよくわかった。 ・ちきゅうがまるいってのはじめてだった。
・ちずのことがよくわかった。

2時限目：カンボジアの人たちのくふうをそうぞうしよう。

大人の人にもカンボジアの現実やよさを伝えなかったため、学校行事の授業参観の時間に行った。まず、カンボジアの道路は95パーセントが土の道路であるという、JICAカンボジア所長のお話し、どんな国なのか想像させた。その際「じゃあ日本の道路は土でできているのかな？何でできているの？」と聞くと、「コンクリート。」と答えていた。「カンボジアではほとんどの道路が土なんだよね。じゃあ、みんなが持っているようなおもちゃやゲームはあるのかな？」と考えさせた上で、「先生、カンボジアで有名な遊びを教えてくださいよ。やってみる？」と、カンボジアの子どもたちがよく知っている「アラピア（休日という意味）」の遊びを行った。アラピアは、真ん中に机を置き、「アラピア～」と歌いながら皆で周り、真ん中にあるオニの「トンペアン！（竹の子の意味）」「ルセイ！（竹）」という言葉に合わせ、みんなでしゃがんだり、竹のように伸びたりする単純なゲームだが、2年生ということもあり、大変盛り上がった。

次におもちゃや布（クロマー）の紹介をし、使い方を想像させたが、なかなか正解が出なかったため、ヒントを出しながら行った。

最後に、地雷でけがをする子どものお話がのっている絵本を紹介した。2年生の子どもたちでも予想以上に地雷の現実をしっかりと受け止め、「けがをするページをもう一度見せて。」という子も多かった。矢継ぎ早に、「日本にもあるの？」「本当にこんなことがカンボジアでは起きているの？」などの質問があがった。初めて知る怖い事実であるので、写真ではなく絵本で知らせることができたのは、発達段階に適していたと思う。「カンボジアではなくノルウェーという国が、カンボジアの子どもたちの命を、地雷から守るために作った絵本だよ。色々な国がカンボジアのことを心配してるんだね。」と授業を締めくくった。



地雷の絵本（表紙）



地雷の絵本（中身）



カンボジアのおもちゃ

《子どもたちの感想》

・アラピアが楽しかった。 ・みんなが助け合っていて、すごい。 ・ばくだんがどこにあるかわからないのに、子どもがふんだらばくはつするなんてこわい。 ・カンボジアのくににうまれてこなくてよかったなって思った。 ・ちえをつかっていてすごい。

《参観した保護者の方々の感想》

・日本では安心して毎日をすごせるが、カンボジアでは危険と隣り合わせであるなど、環境の違いを改めて知らされました。

・日本と違う外国の話、子どもたちにとって、勉強と共に学べることは本当にしあわせだと思います。自分が本当に恵まれていることに気が付かない子どもたち、簡単に物を捨てる・食べたくないものは残すなどなど、大人も同じですが、簡単に寄付すればよいと思っているかも・・・でもそうじゃない!! と思っている私です。

・おもちゃや布を出すたび、子どもたちの関心が高まり、目を輝かせている姿が印象的でした。ゲームばかりしている今の子どもも、もう少し原点に戻って、違う意味での遊びの楽しさを知って欲しいと思いました。

・地雷の絵本と先生のお話があったことで、子どもたちもリアルに地雷の怖さを実感できたと思います。

・物質的に豊かでも、心を豊かにしていくことはまた別の話で、友達に対する思いやりの気持ちや、物を大切にすることをもっと社会全体で教えていかなければいけないなと思いました。

・「かわいそう」と思っているようですが、これから先は、自分に何ができるか・・・という考えも出てくれると思います。

3時限目：日本とカンボア、同じところとちがうところってなあに？

カンボジアの国旗を紹介し、日本の国旗を黒板に書かせた。カンボジアの国旗の真ん中に描かれたお城はアンコールワットであることを伝え、アンコールワットの写真を見せたところ、「大きい！」「かっこいい！」との声があがった。仏像の顔が隠れている写真を5つの班に一枚ずつ配り、「どこに顔があるのかな。」とフォトランゲージを行うと、どの班も真剣に探していた。

カンボジアの伝統舞踊アプサラダンスは始め取り上げなくてもよいかと考えたが、写真を紹介し、「前に来て踊ってごらん。」と言うと、何人もの子どもたちが出てきて、教室中が大爆笑となった。

次に植物・家の造り・ゲーム・公園・食べ物の写真など、コメントをつけながら黒板に写真を張り出した。一見食べ物に見えない写真では、「楽器 マッサージに使うもの 食べ物のどれでしょう？」とクイズを出した。子どもたちは、冷蔵庫の工夫や、モグラたたきゲーム・カラオケボックス・公園など日本と同じものがあることなどに、驚きの連続であった。

最後に子どもたちが遊んでいる写真を見て、日本と違うところ・同じところを発表。違うところとして、「靴をはいていない。はだし。」「まずしそう。」「自転車はあるけど、数が少ない。」とあがったが、同じところでは、「コンクリート」「自転車がある。」「わらっている。」「みんな楽しそう。笑顔」という意見が出た。「写真のカンボジアの子どもになりきって、皆の前で楽しく会話をしてみよう。」と声をかけると、「今日何して遊ぶ？」「何でもいいよ。」「じゃあ公園に行ってみようか。」と、楽しく演技をしていた。



仏像の顔が隠れている写真



アプサラダンス



クイズにつかった食べ物の写真



カンボジアで見つけたゲーム機



カンボジアの遊ぶ子どもたち



カンボジアの子どもになって演技

《子どもたちの感想》

・公園やもぐらたたきゲーム、カラオケがあってびっくりした。 ・れいぞうこ家のかべが、日本とぜんぜんちがった。 ・とてもまずしいくにだと思ったけど、とてもとは思わなくなつた。 ・りょうりがおいしそう。 ・ネコのペットがいた。 ・くつをはいていない子が多い。 ・まずしいくにだけど、いいところもいっぱいあるんだなあと思った。 ・もっとつづきが知りたい。

4時限目：カンボジアの子どもたちのようすを知ろう。

「日本のごみはどう片付けられていくのかな？」という話を導入とし、カンボジアのゴミ山の写真を紹介した。子どもたちには、発見したこと・気づいたことを発表してもらった。「ゴミ山なのに笑っている。」「なんで、一日ゴミ山にいるのかなと思った。」「働くことという、ゴミ山で売れるものを探すこと以外に知らない人もいたよ。」と伝えると、驚いた様子であった。

孤児院の子どもたちの写真では、たくさん子どもたちが一緒に暮らしていること、ベッドが縦に並んでいること、歌を歌ってくれたことなどを写真で伝えた。孤児院の子どもたちは、少ない文房具しかないが、その文房具を使って描いた絵をプレゼントしてくれたと話すと、「ほんとは？」、「今持っているの？」と次々に突っ込みが入った。絵を見せると、「すごい！上手！」「ほんとなんだ！」と感激していた。孤児院の子どもたちが、「ねえ、何かちょうだい。」と言うことなく、じぶんにできることをさがして、行動してくれたということを丁寧におさえた。

家族と離れてカンボジア日本友好学園で学ぶ、子どもたちの様子を写真で紹介すると、「きれいなお姉さんだ！」「すごく笑ってる！」と感想が次々に出た。将来日本に来て働きたいと思っている子どもが多かったと伝えると、「そうなんだ〜。」との感想。カンボジア日本友好学園の子どもたちに、「一番楽しい時間は？」と尋ねると、「家族と一緒に過ごす時間。」「家族と食事をしている時。」という答えが多かったことを伝えると、「私は違うな！」という子もいたものの、大体は「一緒だね。」と共感していた。



ゴミ山の様子



孤児院の子ども



カンボジア日本友好学園の学生



学生たちとアラピアと一緒に遊ぶ

《子どもたちの感想》

・ゴミ山に1日中いるのに、え顔でいるのがふしぎ。 ・ごみのおいもかまわず、てつやブラをあつめて、たおれないのかなと思った。 ・絵をくれた子どもはこころがやさしい。 ・親のいない子どもたちでも、なかよく楽しく生きていてすごい。 ・高校生の人がすごくいいえ顔で、びっくりした。 ・家ぞくの大せつさをあらためて学んだ。 ・大人になったら、カンボジアに行ってみたい。 ・親と遠くはなれていても、一人ひとりの気もちがいっぱいつまった学園は、日本では見られないすばらしさでした。ずっと心の中にとっておきたいくらいです。 ・カンボジアの学生さんたちは、とても大へんそうだから、できることをしたいと思ってきた。まずしい生かつをおくっている人に、あめ玉をおくってあげることができれば、すぐにでもやりたい。 ・さいしょはカンボジアなんて行きたくないと思っていたけど、カンボジアに行って、お友だちとあそびたいと思った。

5時限目：字が読めない・誰とも話ができないうって？困っている人がいたら、どうする？

字を知らないと困ることを体験させるために、子どもたち(班のメンバー)のために、字を読めないお母さん(班の中の一人)が薬をもらってかえてくるという設定をし、読めない文字が書いてあるラベルの飲み物(文字は、カンボジアの言葉で書き、一つだけ本当に薬と書いてあるものを準備した)をみんなで飲んだ。子どもたちは、「本当に飲むの?」「こわいー。」と言いながら、飲んでいた。また誰とも話ができなかったことが何十年も続いたことを知らせ、どんなことに困るか、自分たちだったらどういう風を感じるか発表させた。

次に、『ぐりとぐら』の写真を見せながら、シャンティ国際ボランティア会の移動図書館活動を紹介した。倉庫には、日本からの本が一杯保管されていること、その中に『スイミー』の箱があったことを伝えると、「前に勉強したやつだ!」と喜んでいて。給食が配られていて、その活動はフランスが行っていること、カンボジアのスタッフが必ずいることなどから、日本とフランスとカンボジアが協力しあって活動していることをおさえた。

日本地雷処理を支援する会(JMAS)が地雷を撤去する様子・ユネスコによる水上寺子屋活動の支援の様子、IWY(国際ボランティアセンター山形)による女性組合活動の女性たちの様子を次々に写真を貼りだしながら紹介すると、2年生の子どもたちには一気に難しくなってしまうようで、少しおとなしい雰囲気となった。水上寺小屋のマークを出して、困った顔をひっくり返すと笑顔になるということを発見させた時だけは、「やらせて!」と盛り上がった。女性たちが「お金を稼げるようになったことも嬉しいけれど、こうやって毎日集まってわいわいとおしゃべりできるのが嬉しい。」と言っていたことを伝えると、「しゃべれるほうが楽しいよね。」となんとなく頷いていた。



中身がわからないまま、飲み物をわける



日本から贈られた絵本



地雷のことを教わる子どもたち



ユネスコの寺小屋活動のマーク



組合活動する女性たち

《子どもたちの感想》

- ・子どもがおなかをいためて、おかあさんがくすりをもってきて、子どもにのませるのが大へんだと思った。 ・日本とフランスとカンボジアが手をくんでいるからすごいと思った。 ・本が見れるところ（水上寺子屋のこと）が水の上でうごくのがびっくりした。 ・カンボジアにも田んぼがあるなんて考えてもいなかった。 ・カンボジアにはじらいがあるけど、みんな気をつけてあそんでいるのがすごい。
- ・ぼくだんがありますっていう紙がなかったら、いまごろしんでいたかもしれないと思う。
- ・ずっと話ができなかったけど、しゃべるようになって、その人がわらってたから、ぼくもうれしかったです。 ・大きくなったらカンボジアに行って、まずしい村の人々をたすけてあげた

いです。大きくなってジャイカになって、カンボジアのいいところやまずいところをほかの先生にも教えてあげたいです。 ・ぼくもカンボジアにいてごはんを作ったり、本を読んであげたり、ぼうしを作ってあげたりしたいです。

《参観した保護者の方々の感想》

・話をしてはいけない生活って苦しいだろうなあと思いました。日本人の団体で、カンボジアの困っている人たちの為に色々協力したり力になったりしている方々、とてもすばらしいことだと思うし尊敬してしまいました。

・カンボジアは貧しい国であっても、いつもニコニコ笑顔なところが素敵です（お金もこの国は必要ですが、一番は心のつながりですね）日本人がカンボジアにしていること、私も初めて知りました。（同じ日本人として嬉しく思います）

・カンボジアの実態を知り、びっくりしました。日本で過ごしていることに対する感謝と、そのことを子どもたちに伝えていく取り組みがとても良いと思いました。機会があったら、カンボジアの為に協力できたらと思いました。

・「今自分ができること」に対して、ひとつひとつ丁寧に、楽しく前向きに生活していくこと、私も改めて考えさせられました。

6時限目：カンボジアとぼくたち・わたしたちはつながっているの？

まず、25000人という数字を貼りだし、「何の数だと思う？」と考えさせた。なかなか正解がでなかったため、食べ物に関係があることをヒントで出すと、食べものがなかったり、栄養が不足していたりして、死んでしまう人の数という正解につながった。あわせて、1分間では17人で、そのうち子どもは何人でしょうとクイズに出した（正解は12人）。子どもたちは「かわいそう・・・。」ととても同情している様子だった。「たくさん食べ物って作れないのかな？」と聞くと、「材料があまりないのかも。」と答える子がいた。しかし、すべての人がおなかいっぱい食べられるほど、食べものがすでにあることを伝えると「じゃあなんで死んじゃう人がいるの？」。そこで、ジュースを使って、世界の食べものがどのように分けられているのかを体感させた（6Lジュースを用意。じゃんけんに勝った2人で3L540ml、じゃんけんに負けた6人で120ml、それ以外の24人で2L340mlを分けた）。

次にみんなの食べている好きなお肉の種類を出してもらい、それらの動物（牛・豚・鶏）は、柔らかいお肉を作るため、たくさんの穀物を食べていること、バナナ・えび・まぐろ・アイスやポテトチップスに使われるヤシ油などは、貧しい国から大量に輸入していること、作る人たちの生活費に結びついていないことなど、絵を使いながら伝えた。ここで、普通のバナナとフェアトレード品（作り手の収入を支え、環境に配慮して作られている物）のバナナとを食べ比べさせた。食べ比べた子どもたちからは、「味が違う！」「フェアトレードのほうがおいしい！」と意見がでた。

最後に熱帯林の存在・広さ（日本の50分）と役割（地球上の生き物の50%以上が人間が使う薬にたくさんの植物が使われる CO2を吸収して、地球の温暖化を防止する）減少していること（一年に日本の半分ずつ減っている）について、虫食い式のクイズを出した。日本は熱帯林の木をたくさん切り、輸入していることや、木をたくさん切ると、温暖化が進み、貧しい国の人たちは真っ先に苦しむことを伝えて、授業終了とした。



たくさんのジュースをうらやましがめる視線



お肉の説明を聞く子どもたち



バナナ登場



味比べする子どもたち

《子どもたちの感想》

・しんでいく人の数がおおいのは、ちきゅうのおんだんかのせい!と置いていたけど、日本人にもげんいんがあるなんてはじめてきいて、びっくりした。バナナのあじはいっしょかなあと思ったけど、ちがった。・牛とかとりをかうには、こくもつをいっばいつかわなくちやいけいなんて知りませんでした。・日本はフィリピンとかに「とって。」とか言ってるんだなと思いました。・ほかのくにが、ちがう食べものをおくってきたのははじめて知った。・フェアトレードのバナナがすごくおいしかったです。・いっばいすてている食べものやのみものを、まずいしくにあげたい。・日本は日本なりにたべものがあるから、日本のたべものをとって、食べたほうがいいと思いました。・おなかいっばいに食べて、あまったらすてません。れいぞうこにいれて、あさごはんにしたり、パパ・ママ・おにいちゃんが食べます。・みらい、カンボジアの人にできることをさがしてやりたいです。まずいしくにと、お金もちのくにがなくなって、カンボジアの人が日本にこれるようになるのをねがっています。・カンボジアの人たちにお金をあげたい、食べものをあげたい、カンボジアをたすけてあげたいです。17人のうち、子どもが12人しんじゃってしまっているなんてかわいそう、ちきゅうをまもりたいです。・まずいしくにと日本はつながってないと思ったけど、つながってるとは思わなかった。ねったい林がきえてきて、日本もちょっとあぶないかもしれない。

《参観した保護者の方々の感想》

・食べ物がなく、毎日25000人も人が亡くなっているなんてショックです。とにかく食べ物を無駄にしないように心がけたいと思います。

7 時間目：知ることからできることへ!!～カンボジアとぼくたち・わたしたちはつながっているんだ!～

6 時間目の授業が終わった時点で、教室の三つの壁面上方に、それまでに使った写真をずらりと貼りだしておいた。この授業の始めには、壁面の写真を見ながら、今までの授業を振り返った。次にワークプリントを配布し、「じぶんがこれからできること」を友達と自由に話しあって、プリントに記入するよう伝えた。最後に、何人かの子どもに「じぶんがこれからできること」を発表してもらい、終了とした。



壁面の写真



話し合い前の子どもたち



話し合い中の子どもたち



話し合い後の発表の様子

《子どもたちの書き出した「できること」》

・つかわないへやのでん気をけす。 ・水道を出しっぱなしにしない。 ・れいぞうこをあけっぱなしにしない。 ・あんまり車をつかわない。 ・きゅう食でもう牛にゆうをへらさないようにがんばる。 ・ねったい林の木を切ってしまうとちきゅうがあったかくなりすぎてしまうから、木を切らないようにしたい。 ・テーブルをふくときはティッシュじゃなくて、台ふきをつかう。 ・買い物でバナナを買うときフェアトレードバナナを買う。 ・カンボジアからてん校生がきたら、おかづ小学校や日本のことを教えたい。友達になりたい。やさしくしたい。 ・カンボジアの人におりがみをプレゼントしたい。 ・カンボジアの子どもに、ペンやえんぴつやにんぎょうやふでばこをあげたい。 ・日本のあそびやおかしを教えてあげたい。 ・カンボジアの子とアラピアをしたい。 ・家ぞくをしょうかいしたい。リコーダーを教えたい。 ・お金をかせげるところを教えたい。 ・花たばをあげたい。 ・日本によびたい。

《参観した保護者の方々の感想》

・私も子どもも日ごろから他の国にも目を向けて、少しずつできることをふやしていけたらいい

なと思いました。

- ・世界中には色々な国があり、その国の人たちがどんな生活をしていて、どんな問題があるか、それを知ることができる授業はとても良いと感じました。
- ・自分が幸せだったら、他の人にも幸せをわけてあげたいと思えるような人に育ってほしいです。
- ・家族が『エコ』をするように子どもに指導されています。学習してきたことを家庭でも確認することができ、大変うれしく思います。
- ・子どもたちだけではなく、親もカンボジアや地球温暖化に関心を持って家族で話すことも大切だと思いました。

成果と課題

今回の研修を通して、私が子ども達や日本の大人たちに一番伝えたいと感じたことは、「人と人がつながること。それによって、幸せが広がること。」であった。7時間の授業を通して、日本に生まれ、競争するように育てている子どもたちと競争社会に生きる大人たちとの両方に伝え、「日本に生まれ、世界の現実を知った今、自分たちにできることはいっぱいある！」と、日本の子どもも大人も、自己肯定感をもって明るい未来へと生きる姿勢をもってもらえればと考えた。そのため、授業計画を学級通信で保護者の方にお知らせし、すべての授業を公開授業とした。

2年生の子どもたちではあるが、普段から学習場面において、全員が課題を達成することを目指し、歩き回って教えあったり、自発的なグループで学習したりする『学び合い』(上越教育大学：西川純先生)という方法を取り入れているため、自分たちで積極的に話し合い、様々なアイデアを出することができるだろうと想定し、授業を計画した。初め、カンボジアに対して「まずいいし、じらいがあってこわいから行きたくない。」と感じていた子どもたちも、授業が進むにつれ、「カンボジアの子どもと遊びたい!」「カンボジアに行きたい!」と考えが変わってきた。6時間目で、世界の現実を多く知り、カンボジアや貧しい国と日本がつながっていることを実感させたことは、7時間目に「じぶんにできること」をたくさん出すぞという意欲付けになった点で、大きな成果であった。7時間目を終えると、「カンボジアの授業はもう終わりなの?さみしいな。」と言う子どもも多く、さらに、「1月のフェスティバルでは、カンボジアのことを発表したい!多くの人に伝えたら、温暖化防止になるかも!」と意見を発表する子が現れ、現在フェスティバルにむけてクラスで準備を進めている状況である。

また、保護者の方からみた家庭での子どもの変化について、アンケートをとったところ、「エコに目覚めるようになりました。」「物を大切にするようになった。電気のつけっぱなし・水の出っぱなしをしないようになった。」「祖父・祖母の家に行くとカンボジアの話を聞かせてあげているみたいです。」「テレビのニュースなどでカンボジアの名前が出ると、『戦争はおわったんだけど、お金がなくてくるしんでいるんだよ。』と話す姿が見られています。」「どうすれば地球の人々の生活がよくなるかを考え、どうすればいいかを提案する話が多くなった。命について深く考えるようになった。」「『世界ではどれくらいの子がお腹をすかせて死んでいるか知ってる?』と、大人も知らない会話がポンポン飛び出すようになりました。募金したいな、いらぬ本送りたいな、お金持ちになったらいっぱいお金をカンボジアの人たちにわたしたい、と言うこともあります。自分にできることがないか日々考えているようです。素直でまっすぐな子どもの頃から、こんな風に考えられる授業をたくさんの方が受けられたら、もっともっと世界は正しい道に進むと思います。」などのたくさんの回答が得られた。授業公開したことで、保護者の方たちにとっても、世界の現実を知らない自分たちに気づき、これから行動していきたいと考えるきっかけとなったようで、世界のことについて親子で会話したり、行動したりできることが嬉しいという感想も多く

頂くことができました。

課題としては、伝えたいものが多いばかりに、授業の際こちらから一方的に話す時間が長くなりがちであったことがあげられる。2年生の子どもたちが対象であったため、難しい内容になればなるほど、もっと体験的な手立てを考える必要があった。また、7時間目の話し合いの授業では、実際の話合い活動に20分ほどしかとれなかったが、じっくりと話し合わせるためにはやはり30分は確保できればと思う。また、毎時間の感想を書く前にも、子どもたち同士話し合う時間をとれば、子どもたちの学びはより深まったであろう。伝えることを絞り、子どもたちの主体的に話し合う時間を確保することが、子どもたちの主体的な行動につながっていく。

参考資料

- ・「まんがで学ぶ開発教育 世界と地球の困った現実 飢餓・貧困・環境破壊」
編：日本国際飢餓対策機構 まんが：みなみななみ
- ・7時間目で使用したワークプリント

